

平成26年度第1回観光文化委員会



平成26年4月9日(水)広島市において、仁田委員長をはじめ委員30名出席のもと、平成26年度第1回観光文化委員会を開催した。

委員会では、平成25年度の事業報告および平成26年度事業計画(案)について審議し、原案どおり承認された。議事後、「山陰・日本海の歴史文化資源の掘り起こしとネットワーク化調査」および「関西圏在住者から見た中国地方の観光地の実態と魅力度調査」の報告を行った。

なお、議事に先立ち、NPO法人 出雲学研究所 理事長 藤岡 大拙 氏より『山陰広域観光の可能性～歴史的・文化的な面から考える～』をテーマにご講演いただいた。

【講演】

- 演 題 『山陰広域観光の可能性
～歴史的・文化的な面から考える～』
- 講 師 NPO法人 出雲学研究所
理事長 藤 岡 大 拙 氏

■広域にわたる観光資源

〔突出した弥生の遺跡群〕

1984年、鳥根県出雲市荒神谷で358本というまさに驚愕的な数量の銅剣が発見された。翌年には、銅矛が16本、銅鐸が6個出土しており、合わせて380個全てが国宝に、出土したところは国の史跡に指定されている。

これを皮切りに、ほぼ同時期に西谷墳墓群(出雲市)、12年後には加茂岩倉遺跡(雲南市)、それから田和山遺跡(松江市)、妻木晩田遺跡(米子市・大山町)、青谷上寺地遺跡(鳥取市)と、わずか20年の間に山陰地方の広範囲な場所から非常にメジャーでスケールの大きな弥生時代の遺跡が次から次へと出土した。

こうしてみると、それまでは北九州、大和に目が向いていたが、弥生時代の山陰地方は、日本の中で最も先進的な地域だったということは否定できないと思う。言い換えると、かつて弥生時代においては、北九州、大和、出雲において、弥生期の文化が発展していたということが

いえるのである。

〔大国主物語〕

「古事記」の神話に「大国主物語」がある。この神話は、出雲神話の中で一番地理的な広がりのある内容を持っている。まず、大国主が白ウサギを助けた白兔神社・白兔海岸(鳥取市白兔)～白ウサギの予言どおり兄さん達を追い返し大国主とめでたく結婚した八上比売が祀られている売沼神社(鳥取市河原町)～大国主が兄さん達に殺されてしまう赤猪岩神社(西伯郡南部町)～須勢理毘売と新居を建てたという出雲大社(出雲市大社町)～八上比売が大国主の子どもを産み落として帰っていったとされる三井神社(出雲市斐川町)まで、かなり広い地域をカバーする神話である。

〔万葉の歌人たち〕

因幡、伯耆、出雲、石見の4つの国に万葉の歌人でも有名な詠み手が、国司、つまり県知事として派遣されている。

まず、因幡国司の同伴家持。彼が赴任してきた翌年の正月に雪が降ったということから、「新しき 年の初めの 初春の 今日降る雪の いやしけ吉事」という有名な歌を詠んでいる。これが約四千五百首ある万葉集の歌の一番最後の歌である。

隣の伯耆の国の山上憶良。「銀も 金も玉も

なにせむに 優れる宝 子に^し及かめやも」という少子高齢化の解消のためになるような歌を詠んでいる。

出雲の国の門部王。王という名がついているので、皇族の血筋であろう。歌は2つほどあるが、そのうちの一つが「^お飫宇の海の 河原の千鳥 汝が鳴けば 我が佐保川の 思ほゆらくに」である。飫宇の海とは中海のことで、奈良を流れる川、佐保川を思い出すという望郷の歌といわれている。

石見の国司の柿本人麻呂。死を前に詠んだ歌に「鴨山の 岩根しまける 我をかも 知らにと妹が 待ちつつあらむ」がある。人麻呂は石見に来て、いろいろ歩いたであろう。何といても石見のことを詠んだ歌が多い。東から西まで細長い石見の地形のあちこちで詠んだ歌が残っているというところに特徴がある。

■山陰の一体化を阻むもの

遺跡群や神話、万葉集など、いろいろな形で山陰をつなぐ横断的な観光シーズは随分ある。しかし、それを何か阻害するような要素があるということを考えておかないといけない。行政、あるいは住民がもっと取り組まなければならないと思うが、その前に歴史的な阻害ファクターがあって、それをどう克服するかが大事なのではないか。

〔山陰道交通 ～参勤交代のルート～〕

そもそも律令時代からある山陰道の出発点は亀岡（京都府）、終点は浜田（島根県）である。一方、大和と大宰府をつなぐ最重要道路であった山陽道は、日本で一番大事であるため整備され、大路といって駅の規模から馬の数、道幅と全て山陰道の小路に比べ2倍はあった。では、律令時代の国司などが赴任するときはどこを通ったのか。国家公務員なので、馬や人夫や食事代、宿泊費も全部無料である官道を通る。しかし、律令制度がだんだん崩れ、駅が十分に機能しなくなる平安時代半ば以降は、肋骨道路を通して南へ出ていくコースを通ったに違いない。後鳥羽上皇や後醍醐天皇ですら、一旦山陽道に出て姫路から津山を通して最終的には安来の港から隠岐へ流されるというコースをたど

る。参勤交代も同様で、松江の殿様は伯備線のコースで姫路へ、津和野の殿様は廿日市へと、全て南へ出ていく。

そうすると、本来は、山陰道というものが山陰全体を一体としてつないでいく、そういう機能を果たすべきであるのに、それが機能しなかった。だから、山陰道という道をもつての一体感が出なかったということになる。この点において、同じ裏日本でも北陸道はそういう肋骨道路がなかったため、江戸へ行くにも大坂へ出るにも全部北陸道を通るコースとなり、北陸道をひとつの媒体として北陸全体が結ばれるようなところがあった。従って、明治以降も彼らは裏日本という意識でがちりと固められたと思う。北陸は、自分の真下に東京という権力の所在を意識したが、山陰の真下には権力の所在がない。北陸を裏日本とするなら、山陰は準裏日本となる。

〔物資の交流 ～年貢輸送～〕

もう一つ、船の場合、鳥取と島根が船で行き交って交流するというのもあまりない。例えば、北陸とか東北から来た船の目標は大坂で、大坂をスタートした船は東北とか蝦夷地へ向かうので、波が荒い日本海の風待ち港としてしか山陰へ寄港しない。中世にはこのような航路はないが、航路の代わりに小浜経由で年貢を京都に運んでおり、出雲と因幡で互いに船により物資の交流をするということにはなかった。だから、道と同様、船による水路においても一体感が出てこなかったのである。

■今後の可能性

こういう歴史的な交通の形が横の鳥取・島根の交流を阻害していたと考えてはどうか。また、現在のJRにおいても出雲～鳥取間は急行が2本しかないのに、米子経由の岡山行き「やくも号」は1日に十何本も往復しているという現実がある。これはまさに、律令制が衰退した頃から、そして参勤交代の江戸時代は、特に横の交流を阻害する同様の方向性を持っていることから、なかなか頑固な根強い歴史的な力があるということだ。

そこをもう少し改良して打ち破り、鳥取から

益田のほうまでを繋げるような広域観光ルートを作ることは並大抵のことではない。これだけの共通シーズがあってもなかなか難しい問題である。ルートの的には、山陰2県が横に連携するよりも、むしろ南のほうへ下ってそこに連携を求める方が歴史的には可能性が高い。例えば、鳥取と岡山、鳥根と広島との連携など。出雲大社の大遷宮で鳥根県は大変な賑いをみせているが、旅館もホテルも足らなくて、意外にも三次のホテルが常に満室となっている。三次に宿泊して大社へお参りする、というような行き方が出てきたことは鳥根県側の人間には大変な驚きであったが、こういうところに今後の観光のあり方のひとつのサジェスションがあるのかもしれない。今は良い知恵はないのだが、どうか皆さま方に歴史的なものをどう克服してやっていけばいいのか考えていただきたい。

【議 事】

I. 平成25年度事業報告

1. 観光文化委員会の開催
2. 中国地域における観光振興の課題・方向性の検討
「関西圏在住者から見た中国地方の観光地の実態と魅力度」調査について、当連合会より報告。
3. 山陰・日本海の歴史文化資源の掘り起こしとネットワーク化調査
当連合会より報告。
4. 夢街道ルネサンス推進会議、中国地方風景街道協議会の活動の推進
5. 西日本広域観光ルートの開発・市場調査
西日本の経済団体や観光組織と連携して、東のゴールデンルートに対抗できるルート開発に向けた活動を行った。
6. 中国地域観光推進協議会への支援・連携
 - (1) 「2013中国地方インバウンドフォーラム」の開催
9月米子市にて開催。
 - (2) 旅行会社へのプロモーション
 - (3) ウェブサイトでの情報発信強化
 - (4) 一般市民への情報発信・認知度向上

テレビ、旅行雑誌、ブログの活用。

- (5) FIT（個人旅行）で周遊してもらうための受入体制の充実

ドン・キホーテと連携し、マップの作成等。

II. 平成26年度事業計画

1. 観光文化委員会の開催
2. 観光振興に関する事業（調査・研究）
 - (1) 中国地域における観光振興の課題・方向性の検討
「九州圏在住者から見た中国地方の観光地の実態と魅力度」をウェブ調査により実施し、当地方の認知度向上やイメージの醸成に役立てる。
 - (2) 環中国山地の歴史文化資源の掘り起こしとネットワーク化調査（仮称）
環中国山地の歴史文化資源を掘り起こし、ストーリー性のある統一テーマ毎にネットワーク化することにより、地域の魅力を増進し、新たな交流の場の形成を目指す。本調査結果を反映し、「中国山地歴史文化回廊（仮称）」を作成する。
3. 夢街道ルネサンス推進会議、中国地方風景街道協議会の活動の推進
4. 西日本広域観光ルートの開発・市場調査
西日本の経済団体や観光組織と連携して、東のゴールデンルートに対抗できるルート開発に向けた活動を行う。
5. 中国地域観光推進協議会への支援・連携
 - (1) 「2014中国地方インバウンドフォーラム」の開催
9月松江市にて開催。
 - (2) ウェブサイトでの情報発信強化
 - (3) 一般市民への情報発信・認知度向上
テレビ、旅行雑誌、ブログの活用。
フェイスブック、フリーペーパー掲載（東南アジア）やガイドブックの作製（香港）等。
 - (4) FITで周遊してもらうための受入体制の充実
(担当：菰下)